

音声学から考える商標の称呼の類否 総整理第2回

弁理士 池山拓治

0. はじめに

このコラムも終わりに近づいてきました。今回から最終回まで、これまでの総整理をします。おいしいところだけをつまみ食いすることができますので、マニアさんたちも、それほどでもない方もお付き合いください。

1. 聞こえ度の続き

日本語の聞こえ順において、母音が筆頭で、次に「ほぼ母音」ともいえる「や行」、「わ行」の半母音（半子音）、鼻音が続きます。

鼻音は鼻腔を共鳴させ、かつ、声帯振動を伴うという特徴を有することから、サウンドスペクトログラムで解析すると、黒い横棒であるフォルマント(ネイザルバー)があらわれ、子音の中では一般的に聞こえの高さがトップに位置します。

以下の子音については、有声性によって区分することができます。有声性とは声帯振動を伴う有声音と伴わない無声音とを分かつものです。有声音の方が無声音より聞こえ度が高い傾向にあり、声帯振動の有無はサウンドスペクトログラムによりある程度は可視化することができます。

2. 音韻

ここまでは客観的な音声の分析について取り上げました。ここからは、音声の認識態様を扱う聴覚音声学について扱います。

我々はサウンドスペクトログラムにあらわれる現実の音をありのままに認識しているわけではなく、脳の仕組みによって、自身の言語知識に基づいて主観的に音を聞き取っています。この仕組みを音韻といえます。音韻によって日本語をより日本語らしく話し、聞き取れるようになります。

音韻の代表的な考えとして、拍と音節があります。拍とは字数を音の数と一致させ、一文字を一つの音とする考え方で、このひとまとまりを拍といい、標語や川柳のリズムに用いられています。

拍には種類があり、

- ① 母音のみ 例:う
- ② 子音+母音 例:き（※②の子音には半母音の一部を含む）
- ③ 子音+半母音+母音 例:きゃ
- ④ 「ー」、「っ」、「ん」

の4つに分類されます。

もう一つの音節は聞こえ度が高い音を中心とした音のまとまりです。日本語が自然な日本語らしく認識されるポイントは音節にあり、日本語の学習者が苦手とする項目でもあります。1音節とは

- ① 自立拍1つ+特殊拍「ー」「っ」「ん」
- ② 自立拍1つ+一部の母音

の2つに分類されます。

例を挙げます。「アーモンド」は拍により「ア・ー・モ・ン・ド」と5つに、音節により「アー・モン・ド」と3つのまとまりにわけられ、5拍3音節の語ということなのです。

3. 拍、短音節、長音節の関係について

前回到説明したとおり、自立拍の場合は拍と音節の数が一致し、その場合は単音節を構成します。しかし、自立拍の直後に特殊拍や一部の母音が位置する場合は、両者で一の長音節を構成します。また、長音節＝単音節×2という場合もあります。

雑にまとめますと、2拍で長音節を構成するといえ、

- ①自立拍＋特殊拍「ー」「っ」「ん」
- ②自立拍＋一部の母音
- ③単音節×2

の3つになります。

4. 長音節としての知覚

日本語は長音節のまとまりで認識される傾向があります。

「アーモンド」が「アー・モン・ド」と認識されることについては既述のとおりですが、「アー」と「モン」は長音節の上記①の場合で、「ド」は長音節を構成することなく、単音節のままで残ります。

そもそも、音が長音節というまとまりで認識されていることについて疑いや違和感を持つ人がいるでしょうから、納得していただくために、略称を例として挙げます。公式HPのドメイン名またはディレクトリ名に用いられている略称は公式のものであると考えていいでしょう。

逃げるは恥だが役に立つ⇒ニゲハジ

https://www.tbs.co.jp/NIGEHAJI_tbs/

『私の家政夫ナギサさん』⇒ワタナギ

https://www.tbs.co.jp/WATANAGI_tbs/

Official 髭男 dism⇒ヒゲダン

<https://higedan.com/>

一般的に、長音節の単位で略語を形成し、逆に長音節から成る略語から、原語を認識しており、人は長音節をひとまとまりとして言葉を知覚しています。しかし、その一方で拍が音の単位であることも否定できません。例を挙げれば、吃音(いわゆる「どもり」)は拍を単位としています。吃音者が「弁理士」と言おうとすると、「ベン、ベン、ベンリシ」ではなく、「べ、べ、ベンリシ」と発するでしょう。ですから、拍か音節かという二元論ではなく、分析しようとする分野や観点によって拍と音節を使い分ける必要があります。

以上